

「教師の学び」を捉える

荒井 英治郎（信州大学 学術研究院総合人間科学系）

1. はじめに

本稿は、2022年度に開講した教職科目（選択）「現代社会と教育問題」（2022年1月1日）の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー（前田康裕氏：熊本大学大学院教育学研究科特任教授）の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、山田海智さん、後藤友作さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

2. ゲストティーチャーの話

(1) 「学ぶ」と「習う」

【ゲスト】熊本大学の前田です。荒井先生から「教師の学び」というテーマをいただきました。私が一番話をしたいことですので、渡りに船でよかったと思っています。

私は小中学校の教諭を25年ほど、教頭を2年、その間に教育委員会に勤務、また、教職大学院の准教授もやりました。自分の役割は教職大学院の学生に教える役割だったのですが、今大学でやっていることはICTを活用した授業を進めることで、バリバリの現場の教員となっています。また、先生がどのようなことで苦しんだり、喜びを感じたりしているのか、マンガで教育書を書いている人間です。

今日のテーマは、「教師の学び」ですが、私はいつも「学ぶとは何か」という話をします。例えば、「学ぶ」と「習う」はどこが違うのかです。

【参加者】「習う」は誰か教える人がいて、教える人から発信されるものに限定されると思いました。また、「学ぶ」は自分がどのように学ぶか、積極性次第で一人で学ぶこともできると思うので、「学ぶ」は「習う」より範囲が広いのではないかと思います。

【参加者】「習う」は、相手から受けるもの、受動的な学びだと思います。「学ぶ」は、自分から主体的に学ぶ、自分の興味をもったものに関して知識を深める、机上だけの学びではなくて、実際に体験してみることも「学ぶ」に含まれるのではないかと思います。

【ゲスト】「学ぶ」と「習う」の違いを聞くと、子どもたちは「学ぶ」の方が積極的な感じがすると言います。

そこで、私は次のような話をします。「習う」の場合は、内容が先にあります。例えば、漢字の筆順を習う、三味線の弾き方

を習うといいます。『学ぶ』の場合は必ずしもそうではなくて、あの人の生き方から学ぶ、失敗から学ぶという言い方をします。だから『学ぶ』も『習う』もどちらも大切です。だから、『学習』というのです」という話をします。さらに、「学ぶ力があれば、何からでも学べる。失敗からも学べるし、どのような人に会っても学べる。だから学ぶ力を身につけていこう」という話をすると、子どもたちは頷いてくれます。私は、「授業」のあり方を考えていく場合に、子どもたちも「学ぶ」ということを意識しながら活動に取り組まなくてはならないと思っています。

私は、「学ぶ」を「何かに気づき、自分が変わること」と定義しています。「だから色々なことに気づいていこうね、どんどん自分を変えていこう」という話をします。こういう意識が子どもたちにあるかどうかで大分違ってくると思っています。例えば、同じ失敗をしても、「ぼくはダメだ」と思えば良くなれないし、「どこが失敗の原因だったかを考え、次はこうしよう」と思えば、どんどん良くなっていきますよね。

さて、今日は大きく3つの話をしようと思っています。1番目は「リフレクション」、2番目が「ストレッチ」、3番目が「エージェンシー」です。これからの学校の先生にはこの3つが必要だと思っています。そして、私自身もこの3つを実践できるような教師になっていきたいと思っています。

(2)リフレクション

【ゲスト】最初は、「リフレクション」です。今は色々な意味で、大変な時代です。環境の問題は待たなしです。経済が発展すれば

二酸化炭素やゴミが出ますし、貧富の格差の広がりが出てきます。貧富の格差の広がりが出てくると、社会が不安定になります。また、ウクライナとロシアが大きな戦争するとは誰も予想していなかったと思います。それから、今お見せしているのは GDP の推移のデータですが、1989年を境に、アメリカ合衆国がずっと右肩上がり伸びていることがわかります。平成元年に2位だった日本の GDP の伸びを見ていただくと分かりますが、昭和の終わりから平成の初めにかけてすごく伸びているのが分かります。1985年から95年にかけては伸びていますが、それ以降は伸びていません。その間に伸びてきたのが、中国です。アメリカのIT企業を見ると、Appleや、Microsoftの創業は1970年代の後半から1980年代にかけて、インターネットが急速に広がっていったのが、1995年のWindows95からです。そして、Yahoo!やgoogleも90年代の終わりに創業して、2000年代はFacebookやYouTubeなど、SNSの時代に入っていきます。つまり、この30年間で経済が大きく変化しているわけです。日本の経済を支えてきた電器産業や自動車産業に頼っていた日本は、新たな道を考えなくてはならない状況です。この状況の中で、先生の役割を考えていかななくてはなりません。

以前の学習指導要領では、「コンテンツ・ベース」の学習、つまり、「何を知っているか」がよく言われていました。例えば、理科ならこれを知っている、社会科ならこれを知っているというものです。これ自体とても大切なことで否定はしませんが、それだけだと実際の社会問題を解決できないため、今は「コンピテンシー・ベース」の学習が大

「教師の学び」を捉える

切だと言われています。汎用性の高い資質・能力です。

ここで皆さんにお聞きしたいのですが、力を合わせないと複雑な問題解決はできませんね。例えば、ドローンやロボットを1人で作ることは難しいですから、みんなでやらないではいけません。では、どのような人と一緒に仕事したいですか。

(チャットで学生が書き込むのを読み上げながら) 誠実な人、挨拶ができる人、協調性がある人、意見をまとめるのが上手な人、リーダーシップがあって判断力のある人、協調性がある人、努力できる人、指示がしっかり通じる人、知識が深くある人、よく似た目標を持っている人、間違いを認められる人、確かに大切です。

実は、これらは資質・能力としてすごく重要視されていて、「認知的スキル」、いわゆるペーパーテストで測ることができる頭の良さだけではなく、「非認知的スキル」や「社会情動的スキル」と呼ばれる資質・能力です。自分自身の人間性も含めて、資質・能力として言われています。ですから、従来の知識伝達型の授業では、その育成は上手くいきません。そこを意識しておかないと、教師の役割は従来と同じことになってしまいます。

今お示ししているのは、明治時代の学校の写真です。江戸時代が終わり、欧米列強に勝つためには国民のレベルを一定水準に引き上げなくてはならないので、同じ年齢の子どもたちを同じ場所に集めて同じことを学ばせることがずっとやられてきました。それが明治、大正、昭和、そして平成と、教師が教える、児童生徒は教えてもらうという授業が普通になってきたわけです。しか

し、この授業では、先ほどの資質・能力は育ちません。

例えば、やる気や他者に対する敬意は育ちにくいです。そこで、子どもたちが自分で色々な意見を言ったり、協力したりする授業が求められるわけです。

小学校の場合は、以前から子どもたちが手を上げて発表したり、グループで学習したりということがやられていますが、手をあげている子どもたちだけが授業に参加できる状態では、資質・能力は育ちにくいという点で、反省もあるわけです。

熊本市では 2018 年度からタブレット端末が入りました。iPad が入れば授業が良くなるかということではなく、従来の授業プラス ICT ではなくて、ICT を使って授業改善を行っていく取り組みをしています。そして、資質・能力を伸ばす授業を作っているとしています。教師が教える授業は先生が教えた内容があり、子どもがいて、知識や技能を伝えます。挙手指名型もありますし、先生が解説する場合もあると思います。知識技能は確かにその段階で身につきますし、テストをやればそれなりに点数が取れますが、これは時間が経つと薄くなってしまわないでしょうか。自分で学ぶ力はなかなか身につけません。教えてはだめだという話ではなく、子どもが「学び取る授業」が大切だということです。解決すべき問題を「めあて」として、学習の到達目標や協働して解決できる課題等があり、それに向かって「対話」しながら自分の考えを出していく。それにより相手の意見を尊重したり、相手の持ってきた情報をしっかり聞いたり吟味したりする活動が生まれてくる。そのプロセスで知識技能が身に付いたり、

思考力・判断力・表現力が高まったり、学びに向かう力、先ほどの人間性の涵養も期待できる授業になるのではないのでしょうか。

では、教師は何をするのか。教師には、子どもたちが「振り返り」ができるようにすることが求められます。学習の内容、こういうことを学んだということと、自分の学び方はどうだったのかを子どもに振り返らせて、それを先生が形成的に評価する。例えば。

「〇〇くんはここを学んでいるなあ」、「〇〇さん、こういう学び方をしているんだなあ」と評価していきます。これまでの授業が全てダメと言っているわけではありません。従来の授業のままタブレットを使おうとすると「タブレットはどこで使おうか」という話になってしまいます。

問題はこうした授業で経験を重ねた場合、教師は成長するかです。端的に申し上げると、私はそのような経験を重ねるだけでは教師は成長しないと思っています。20代位の先生はあまり差がないのですが、30代以降どんどん差がついていきます。なぜ、差がつくのか。これは教師の成長の問題点と関係しています。若い時は、やり方がわからないから、例えば「明日は社会科の授業があるから、しっかり発問を考えておこう」と考えて授業準備をします。そして、授業に挑み、「ちゃんと授業が成立しているぞ。やった」という話になるわけです。そして家に帰り、「明日の準備をしよう、結構自分も頑張っているな」という感じです。これもやっていることは間違っていないのです。ただ何が問題かということ、やった授業は本当によかったのかが振り返られていないのです。

次に、教育技術をたくさん身につけると教師は成長するののかという点です。教育技

術は非常に便利です。特に教職1年目から3年目ぐらいは、授業を成立させるために、がむしゃらに勉強しなければなりません。しかし、教育技術には、教育技術特有の問題点があると思います。それはどういうことかということ、教育技術がどのような背景で生み出されるか、文脈が大切という点です。いわゆる実践家たちは、理想とする授業の理念と現実との間の問題に、例えば、俳句の情景を想像させたいという授業の理念に対して、情景が想像できない子どもの現実に直面した場合、授業の名人たちはすごく力を注ぎ、その過程で教育技術を生み出します。実践家は目の前の課題を解決するために、教育技術を生み出す。このことは全く問題ありません。例えば、詩や俳句の情景を想像させる時に「どのような音が聞こえてきますか」や「どのような匂いがしそうですか」を問うことで、情景を浮かびやすくさせるという教育技術があります。それが効果的な場合、他の教師に伝わっていくわけです。しかし、問題は教育技術が文脈と関係なく使われることが往々にしてあり、技術を単に身につければいいという「技術的合理主義」が加速すると、生み出された文脈が伝わらないという問題が起きます。どういう状況でそれが生み出されたかに踏み出せないため、実践家が考えている理念が十分に理解されず、文脈が切り離されたまま技術が伝わっていくことになります。若手教員が授業を成立させるためにはこれでもいいかもしれませんが、教師になって10年も20年もこの学び方をしていると問題が生じてきます。要は、「技術」とそれが通用する「問題」が、本来の「問題」と一致すれば効果的に作用しますが、目的が曖昧な場合、そ

「教師の学び」を捉える

の技術を使うことが目的になってくるのが往々にしてあるのです。本来あまり役に立っていないにもかかわらず、この技術を使えば大丈夫だと思い込んでしまうと、うまくいっているかどうか反省できなくなってしまいます。

では、優れた教師は何をしているか。優れた教師は、授業中に「ちょっと変えてみよう」、「こうしてみよう」といったことを無意識にやっています。「あっ、発問が難しそうだ。ちょっとこれで変えよう」、「やってみてから、もうちょっとこれやり直した方が良さいな」ということです。そして、授業後に振り返って「発問はこうすればよかったかな」、「自己評価カードを変えてみよう」など、改良案を考えたり、自分の授業のビデオを観て分析したりすることもあります。

このようにリフレクションは、非常に大切です。なお、授業が良かったかどうかを省察するためには、規準が必要になります。その規準は授業観、教育観、学習観など、「観」と呼ばれるもので、それを磨き続けず、知識伝達型の授業でいいと思っていると、自分の授業は良いのか悪いのか判断できなくなるわけです。リフレクションはそこまで難しいことではなくて、「もうちょっとこうしよう」、「ああしよう」など、振り返りを常に繰り返していくことです。優れたスポーツ選手はみんなやっていることです。

リフレクションとは、行為を行った際に振り返って、気づく、つまり、冒頭の「学ぶ」ということです。気づきを生み出し、吟味して、新しい選択をして次の行為を起こす。「学ぶ」と「習う」の違いはそこにあるわけです。だから「学ぶ」というのは、常に自分に気づきを促し、変化を持続させていくこ

となのです。

尾ノ上小学校の校内研修の事例を紹介します。尾ノ上小学校は、代表の教師だけが年に数回行う研究授業では全体の教師の授業は変わらないということで、自分の授業を改善するプロジェクト学習をやりました。自分の日常の授業の問題は何かという課題を出し合って、問題を解決するために何にどう取り組むか見通しを立てて、皆で取り組んで自分の授業を改善するという内容です。夏休みに「自分がやりたい、自分が変えたい教科」を選んで、教科グループに分かれて、授業の課題と改善策を考えたのです。

そして、ここからが大切なのですが、「授業に大切なことは何か」を話し合っていきます。つまり、実施された研究授業だけについて指摘するのではなく、研究授業を一般化し、概念化とも言いますが、大切なことは何かという要点をまとめて、自分自身の授業をどう改善するかまで話し込んでいくわけです。従来の授業研究会は意見交換、挙手指名やワークショップで終わりがちでした。助言者が来て終わりという形を尾ノ上小学校では前半は対象となった研究授業について話し合い、後半はポイントの概念化を通じて、自分の授業をどう変えていくかを考えていきました。

(3) ストレッチ

【ゲスト】2番目の「ストレッチ」の話をします。私のマンガの主人公が、友達の教頭先生に「授業研究だけが教師の仕事だと思っているのか」と突きつけ、教頭先生は「それ以外何があるのだ」と言い返す場面があります。

今お示ししているスライドは、従来の教員研修の様子です。「新しい知識や新しい方法を教えてもらおう」と、「教師自身が受け身になっていないか」と問いかけます。本来、教師は、何かやってみて学び、学んだことを実践しながら成長するという、聞いたことを実際にやってみる、やってみて子どもが変化し、変化したのを見て自分も変化するということが多いはずで、ですから、やるということはずごく大切に、それに気づきを促していく。だから、先生は「教える専門家」でもありますが、あまりにも教えすぎてしまうと子どもは考えなくなりますから、「学びの専門家」でもあるということです。子どもたちは何に気が付いたのかなというところに「気付く」ということです。また、学びの専門家であるということは、自分自身も学びのプロフェッショナルでならなくてはならないということです。子どもに求められる力は教師にも求められます。つまり自分も学ぶ力を高めなくてはならないということです。そこで、私が重要だと思っているのが、「自己マスタリー」という言葉です。

おそらく皆さんが50代、60代になる頃は、まだまだ先の人生は長いはずで、昔よりも健康寿命は伸びていますし、寿命そのものが伸びている。100年ぐらい生きると思います。教師の後にもまた人生が続くということを考えながら、教職を続けた方がいいと私は思っています。これは、仕事を通じてどのような未来を創造したいか、どのような自分になりたいかという自分のビジョンを描くことを意味しています。そうすれば、自分の能力と意識を絶えず伸ばすことができます。ですから、どういう自分にな

りたいのかを意識しながら教師を続けた方がいいと思います。目の前の授業のことはばかりではなくて、もっと先を見た方がいいです。「自己マスタリー」とは、自分が本当に求めている結果を目指す能力を絶えず伸ばしていくことを指します。自分がどういうことで力を発揮したいのか、自分の強みは何なのかを考えながら、その力を伸ばしていくということです。

私のマンガの主人公は、次のように言います。「自分のビジョンを考えておくのですよ、今からでもね。自分の人生をどのように組み立てるかをずっと考え続けるのです。すぐには答えが出ないから。多分答えは出ないですよ、そんなに簡単には」と。何年もかけて、自分はどのように生きたいのか、自分の人生をどのようにしたいのかをずっと考えながら教師をやったほうがいいと思うのです。学校現場は確かに忙しいです。しかし、「忙しい」を言い訳にしまうと、幸せになれないと思います。そこで、一歩離れて自分を見つめて、どのように生きようか、自分の可能性を考え続け、自分を見つめ直していくことが大切だと思っています。

また、マンガの主人公は、次のようなことも言います。「どのように社会や人生をよりよいものにしていくかを考え、主体的に学び続けて自ら能力を引き出していくことが今の子どもたちが求められているのです。それを教師ができなくてどうするのですか」と。ストレッチは、自分の強みを絶えず伸ばし続けるということです。そのためには、自分の強みを知っておかなくてはなりませんから、人から色々強みを聞いたりすることも大切です。それは特技とかではなくて、人間性や企画力、発想力だったり、そういった

ことも合わせて強みとは何なのかを自分で考えていくということです。自分の強みを組織に活かしたり、他者に活かしたりしてみると、結構楽しいものです。松尾睦さんの『職場が生きる人が育つ「経験学習」入門』では、「ストレッチ」と「リフレクション」と「エンジョイメント」、特に、仕事の中に「意味」を見出すことが大切だと書かれています。面白くない仕事だと思うか、自分の人生が楽しくなる仕事だと思うかでは、仕事の捉え方が違ってきますね。

(4) エージェンシー

【ゲスト】最後に、「エージェンシー」についてお話しします。「エージェンシー」は、21世紀の先生に求められている概念です。PISA 調査を考えた OECD の教育スキル局長のアンドレアス・シュライヒャーは、「教師の役割がカリキュラムを教える人から実践者へと変わる」と言っています。これはなかなか深い意味があり、知識や技能を教えるよりも、自分自身が社会をよりよくしていく、人生をよりよくしていくための実践者になるという話です。今の学習指導要領は、まさに「社会に開かれた教育課程」を全面に打ち出していて、学校の教育課程と社会をつないでいこうという考え方です。私は大賛成です。

「エージェンシー」とは、「自ら考え主体的に行動し、多様な人々と協働しながら持続可能な社会へと責任をもって変革していく力」を指します。簡単に言えば、「人のせいにはしない」ということです。人のせいにせず、自分でよりよい社会をつくっていく力、そういう力を子どもたちにも求めながら、

先生たちもそのような力をつけていこうという話ですね。自分の強みを人のために生かすということです。「Give & Give」という言い方をしますが、自分の能力や技能をどんどん出していきましょうという話です。自分のワクワクや強みが、組織や色々な人の役に立つと、第二の人生を切り開いていくことにもなると思っています。

例えば、私は、「大人の学び Bar」という会を主催しています。社会課題に取り組む人々の話を聞き、自分事として何ができるかを参加者全員で考えることを目的とする会です。今は中断していますが、月1回500円ぐらいですが、結構な人が集まってくるのです。これまで、OriHimeを開発した吉藤オリイさんの映画を作った古新さんと呼んで、「テクノロジーにおいてどのようなことが大切なのか」という話を聞きました。要するに、自分が少し動くことによって社会が動き出すことを実際にやってみようという話です。自分で何ができるかやってみることによって、自分の得意を生かせるし、自分の人生も幸せになっていくと思います。

私の好きな前野隆司先生の『幸せのメカニズム 実践・幸福学入門』（講談社現代新書、2013年）の中に、「幸せの4つの因子」というものがあります。これは、「やってみよう、ありがとう、なんとかなる、あなたらしく」というもので、私はすごく大切だと思っています。単純にお金がたくさんあればよい、時間がたくさんあればよいという問題ではなくて、「やってみよう」と自分の得意なことは伸ばして、相手が喜んでくれるのはすごく楽しいし、やりがいもありますよね。今回も荒井先生から呼んで頂いたのはすごくありがたいですし、皆さんと繋が

りが持ててよかったと思っています。そして、「なんとかなる」という楽観性も大切ですよね。荒井先生からオファーがあったときは、私で大丈夫かなと思いましたが、なんとかなるだろうと思って引き受けてみました。私はあまり難しい論文は書けず、マンガしか描けません、「あなたらしく」、それでもいいのではないかと、人の目を気にしない自分を作ることで、自分らしく人生が生きられるのではないかと考えています。

最後に、マンガの主人公の「良き学び手は苦労さえも学ぶ材料にする」、「人を育てるって、そもそも簡単なことじゃない」というフレーズをご紹介します。苦労の連続ですから、そう簡単ではありません。色々な子どもがいるし、色々な保護者もいます。同僚にも変な人がいたりしますが、「でもおれたちは教師の道を選んだ。そしてこれからも教師の道を選ぶ人たちがいる。だからこそ…」と主人公は言うのです。「教師になって幸せだったって、そんな人生を送ろう」と。

つまり、自分の人生とは自分で幸せにできるものですから、色々な考え方をもち、優れた学び手になったり、色々な人に感謝したりしながら、「自己マスター」を主軸に置いて人生を送っていくとすごく楽しい、幸せな人生になると考えています。

(5) 質疑応答

【参加者】子どもに求められる力は教師にも求められるのであって、「自己マスター」で自分の求める力やビジョンを考え続けていかなければいけないという話がありました。例えば、社会から「求められている力」と「なりたい自分」、あるいは自分が「求め

たい能力」が対立する場合については、どのように考えたらいいでしょうか。

【ゲスト】社会が求めている力と自分がやりたいことが違う場合ですね。難しいですね。社会が求めている力、例えば、AIを自由に使いこなせるような力が必要だという状況で、自分はそこに興味がない場合どうするかという話ですね。まず「社会が求めている力」は、色々な力です。それが多様性を認めることだと思うのです。AIが得意な人がいた方がよいのだけれども、AIは得意でなくてもよいから、例えば、自然の中から問題を発見したり、地域と企業をつなぐコーディネーター的な役割が実は求められていて、そこに自分のやりがいを見出した方がいいという場合もあるはずです。簡単には見つからないので、ずっと探し続けていくことが大切だと思います。

【参加者】校内研修では、授業を受けた生徒の意見は参考にされたりしますか。

【ゲスト】私たちが進めている授業研究や熊本市の授業では、授業の最後に必ずリフレクションを書いてもらっています。そのリフレクションを見ると、子どもが何を学んだのかが分かります。それをみんなで共有します。ただ「教えてもらう授業」から「学び取る授業」への変化は時間がかかります。特に中学校は、振り返りの時間が少ないという意見が多いです。先生の授業を見てみると喋りすぎが多くて、子どもが逆に受け身になってしまうことがあるのです。

【参加者】「もっとこういう授業をしてほし

い」といった授業スタイルに関する生徒からの要望は、リフレクションに含まれるのでしょうか。

【ゲスト】通常授業では含まれません。学期末などに生徒の意見を聞いたりする場合がありますが、それは授業に対する要望であって、リフレクションとは少し違いますよね。リフレクションは、自分をみる話です。

【参加者】「幸せの4因子」の4つ目に「あなたらしく」というのが、人の目を気にしない自分を作ることが大切とお話されていましたが、私には、「失敗したらどうしよう」と周りの目を気にしてしまう性格があります。どうしたら克服できるでしょうか。

【ゲスト】はっきり言うと、「自分で考えてみましょう」という話です。答えはないです。自分を良くしていこうとするためには何かこれをすれば大丈夫ということはありません。自分を良くするためには、自分で考えていくしかないと思います。少し厳しいことですが。

【参加者】人を育てる難しさや「子どもが育ったなあ」と感じる時はどのような時ですか。

【ゲスト】人を育てるのが難しいというエピソードとしては、例えば、私は小学校6年生の担任を何回かしたことがあります。その時に女の子たちが反抗的だった時がありました。女の子同士に仲違いがあったようなのです。いつもリーダーだった女の子が急に1人ぼっちになって、みんなから外

れちゃったのです。それでどうしたのだろうと思って聞きました。そうしたら「あの子は実はずっと私たちに順番にいじめていたんです、無視していたんです」と。それに対して、私は、「でも、あなたたちが同じことやったら問題解決しないんじゃないの」と言ったんです。そうしたら、女の子が烈火の如く怒って、「なんで先生はあの子だけかばうのですか、私たちのことを見てなかったってことでしょ」と言われたのです。私はその子たちに謝ることしかできませんでした。結局、その子は保健室登校みたいになってしまいました。最終的には、無視していた子と呼んで、もうやめてくれ、頼むからやめてくれと言った時、私は涙が止まりませんでした。小6の女の子の前で大泣きしたのです。それでね、その子たちが血相を変えて保健室に行って、いじめていた子を連れてきたことが昔ありました。

もう1つ、別の小学校の6年生とのエピソードがあります。中学校から転任してきたばかりは割と厳しめに学級経営を行っていました。前の先生はすごく優しい若い男の先生だったものですから、女の子たちが、反抗とまではいかないですが、僕のことを真正面に、目を見なかったのです。しかし、一方で、いじめられていた女の子がいましたから、あえて厳しめに接していったのです。結局、卒業まで、その女の子たちとあまりうまく交流ができませんでした。ところが何年か経って、彼女たちが大人になった時に私を居酒屋に呼んでくれて、「先生、ごめんなさい」と言ったのです。「あの時に自分たちは間違っていました、先生に対する反抗みたいなのがあって、ごめんなさい」と、しっかり目を見て言ったのです。それ

を見た時に、やはり人を育てることは難しいと思いましたがね。その場その場で上手くいっていたとしても、本当によいのか、あるいは、その時にはうまくいかなかったけど、後でよくなっていくのかは分からないものです。人間の成長は、長期的に見ていかないとわかりません。だから、人間を育てるのは改めて難しいと思います。その意味では、上手くいかなかった経験は若いときに特に多いですね。

上手くいっていった経験といえば、教師経験の後半は学級経営が上手くいっていたことが多くて、年度末に子どもたちと別れる時、僕が「この学級で良かった」と言った時にみんな泣いてしまうことが多かったです。賛否両論あるでしょうが、人間関係を上手く作ることができた時、子どもたちが互いをリスペクトできる人間関係が生まれた時は上手くいっていったと感じます。

【参加者】物事は思い通りにいかないことが多かったと思いますが、当時はどうのように受け止めていたのですか。

【ゲスト】学級経営で苦しんだこと、保護者対応で苦しんだこともありますが、当時の私は1人で抱え込んでしまいました。今思えば失敗だったなと思っています。本当は色々な同僚に相談するべきでしたね。当時は自分1人でやらなくてはいけない、学級がうまくいってないことを他の先生に知られるとよくないなど、色々なことを心配していました。ただ上手くいかなかったからダメという訳ではなく、そこから学んだこともすごく多かったです。要は学ぶ姿勢の問題だろうと思います。

【参加者】強みを伸ばしていくという話がありましたが、自分の強みをまだ分かっていません。前田先生にとっての自分の強みは何でしょうか。

【ゲスト】自分の強みは、意外と自分では気付かないことが多いです。「強み」というと、特技になってしまいますよね。私の場合、マンガを描ける特技があるのですが、楽器を弾ける、絵を描けるというものも特技と考えて良いでしょう。しかし、発想力や人間関係、企画力などは自分では中々気づかないのです。なぜなら、自分は普通にそれをやっている、当たり前に行っているからです。だから私は仲間の存在が非常に大切だと思っています。心を開いて話し合える仲間が、私の場合は7人ぐらいいます。その仲間と毎月オンラインで読書会などをやっていますが、その7人は何年も付き合っているから私のことをよく分かってくれています。互いのよいところを挙げましょうということをやったことがありまして、その時に「企画力」と言われました。自分でも全く知らず、思ってもいませんでした。50歳ぐらいの時に言われたのですが、50歳まで全く気づかなかったですね。ですから、20代ぐらいでは自分の強みは全然気付かないと思います。恐らく30代、40代になって仕事を通して、自分の色々な経験の中から見つかっていくと思いますし、他の人から見つけてもらった方がよいと思います。その時に私は「企画力」と言われたから、自分の強みだと意識するようになって、すごく企画をするようになりました。「自分の強みって何かなあ」と考えながら生きていくと

よいと思います。

【参加者】「対話」とは何かについてお伺いしたいです。その日の授業が本当によかったのかという検証が大切だと言われていましたが、対話の目的がきちんと達成できているかの検証も必要だと思いました。例えば、先生方に遠慮してあまり意見が言えない後輩の先生だったり、忙しくて研究授業の振り返りができなかったり、先生同士で授業をよくしていこうという気運がなかったり、対話を進めていく中で、多くの障壁があると思っています。今までどのような壁を乗り越えられてきましたか。

【ゲスト】対話とは、「相互作用を起こすこと」だと思っています。例えば、対話することで、自分がよく分かっていないということに気がつきませんか。口に出して発しなさいと言われた時、何かと自分ではうまく言えないといったことがあると思います。そのことによって、自分の認知の状態を知ることができます。例えば、冒頭の「学ぶ」と「習う」はどう違うかという問いに、すぐ言える人と言えない人が出てきます。すぐ言えないというのは、結局「学ぶ」と「習う」の違いをあまり理解していなかったということですね。そこで大切なことは、自分がよくわかっていないことを理解することだと思っています。そこが「メタ認知」に繋がっていくわけです。メタ認知力が高いと、自己調整力がついて、学ぶ力がついていきます。自分はどのように学ばばいいのか、何が分かっていないのか、何を補ってあげればいいのか分かってきますから、対話を通じて、メタ認知力を育むことができます。

【参加者】自己を見つめ直す機会は日常生活でよくありますが、リフレクションを何回もしていくことと、深く深くしていくこと、量と質の関係についてはどのようにお考えですか。

【ゲスト】リフレクションの量と質については、何に関してリフレクションするかによって違うのではないかと思います。私は、何かやった後に必ずリフレクションしています。5分ぐらいかけて今日は何分から何分までの講義で、どれくらいの範囲、割合はどれくらいの時間で、どういう質問があったかを書いておくのです。そうすると意外と後から役に立ちます。なぜかという、人間は忘れるのですよ。確かその時には納得して聞いていても、1日とか2日時間が経つと、何を話したのか、何がダメだったのか、「気づき」を忘れてしまうのです。ですから、簡単にメモをとって量をこなすことは大切だと思います。

質の話で言うと、例えば、私は今マンガや色々な本を書いているのですが、1年間かけてやるわけです。書いて、出して、その出している最中や考えている最中に、ずっと深く考えることがあって、本当にこれはページの中に入れ込む情報なのかどうか、自分の長い教師人生の中でこの部分は出した方がいいのではないか、あるいは、出さない方がいいのではないかは、質が問われることです。ですから、長い時間かけて考えたり、それに必要な情報や本を見たりすることがあります。

【参加者】「反省的实践者」や「技術的熟達

者」というキーワードに対して、教職を目指す人間は、まずはどちらのモデルを目指すべきでしょうか。

【ゲスト】いい質問ですね。私はどちらも大切だと思います。教育技術もちろん必要です。技術がないと授業は成り立ちませんから、最初は技術的熟達者を目指すべきだと思います。そして、リフレクティブに自分のやり方を振り返って、新しい方法なり、新しい考え方なりを吸収していった方がいいと思います。

私がいつも講演やセミナーで最後に言う言葉があります。佐伯胖さんの言葉で「人は、教えてもらえるとと思った瞬間、考えないスイッチが入る」というものです。常に答えを誰かに教えてもらおうとするのではなく、自分の中で学び取る姿勢を持った方がいいのではないかと考えています。